ジェンダー研究会　小特集
「トランス・ポリティクス」の可能性

はじめに

池内靖子

2007年度第7回ジェンダー研究会では，「トランス・ポリティクスの可能性」というテーマを設定した。ここに掲載するのは，そのときの報告者中村美亜氏の論文と2名のコメンテーター，堀江有里氏と森岡素直氏のコメントである。ゲストスピーカーの中村美亜氏には，そのときの報告がきわめて刺激的，かつ深く掘り下げられた論考を展開されたので，当日の口頭報告をテープ起こしした報告を掲載するのではなく，あらためて論文として執筆を依頼し，論文の形での掲載をお願いした。二人のコメンテーターのコメントは，当日の報告をもとに，若干の修正加筆がされている。フロアからは興味深い論点，質問が出されたが，ここでは割愛したことをお断りしておきたい。研究会の概要は次の通りである。

2007年度　第7回ジェンダー研究会

主　　催：国際言語文化研究所プロジェクトA1
共　　催：科学研究費補助金基盤研究B（代表：二宮周平）
日　　時：2008年1月25日（金）　16：30～19：00
場　　所：学而館2階　第1研究会室
テ　ー　マ：トランス・ポリティクスの可能性
報　告　者：中村美亜（東京藝術大学）
コメンテーター：堀江有里（立命館大学）
　　森岡素直（立命館大学社会学研究科）
司　会　者：高橋慎一（立命館大学文学研究科）

中村美亜氏の提起によって，上記研究会のメインテーマは，「トランスジェンダー・ポリティクス」ではなく，「トランス・ポリティクス」をめぐるものだった。それは，「ジェンダーに加えて身体や認識，アイデンティティや欲望といったものも射程に入れた」もので，「ジェンダー」とともに，「身体」や，あるいは「認識」についても，トランスするポリティクスの可能性を考えるという問題提起だった。

中村氏の新しいキーワード「身体化されるジェンダー」あるいは「ジェンダーの身体化」も，通常よく用いられる「身体のジェンダー化」という表現ではない。中村氏によれば，彼女が今回用いた「ジェンダーの身体化」は，これまでの「身体のジェンダー化」と必ずしも矛盾するものではなく，同じ現象を「反対の視点」から表現しているという。しかし，ジェンダーとい

う抽象的な規範なり法なりが具体的に実体化し自然化されるプロセスを批判的にとらえ直す上で，「ジェンダーの身体化」というキーワードは新たな有効性をもつように思われる。

トランス・ポリティクスの可能性を論じる際に，中村氏は，オペラと宝塚という舞台空間，異性装の演技，声を例に出して論じているが，歌劇における声の主体の問題や，観客が想像・創造するファンタジーの身体についての考察はきわめて興味深い。まず，オペラにおける声の主体とは何かという問いかけに始まって，構造主義の記号論者バルトが，文楽との対比を用いて批判的に問い直した西欧近代のオペラに対する論考を援用しつつ，論を展開している。バルトの記号論から，ラカンとジジェクの精神分析へと理論的枠組みを転換しつつ，舞台空間に生起するシニフィエとなりえない「ごつごつした「現実界」」を読み解く中村氏の考察はきわめて刺激的なものである。

この刺激的な論考に応答して，フロアから，声とは何か，身体とは何かという問題を考える場合，ラカンとともにデリダが重要な参照軸になるのではないか，という指摘が岡野八代氏からなされたことを付け加えておきたい。中村氏の考察はデリダにはふれていないが，たしかに，声が語る統一的な主体を構築する西欧哲学の形而上学に対するデリダのポスト構造主義の脱構築は，きわめて重要な理論的枠組みとなるだろう。

ところで，中村氏とは少し解釈が異なるが，私自身は，バルトの演劇論が，ブレヒトの演劇論，とりわけ，ブレヒトが提唱した叙事的演劇や異化作用に深い影響を受けて，西欧演劇モデルを批判的に考察したことにふれておきたい。中村氏の引用したバルトによる文楽とオペラとの対比は，西欧ブルジョワジーの演劇における「唯一不可分の起源としての身体」の把握に対する批判であり，「全体性の模範になる器官の統一性」としての身体観に対する批判と読めるからである。バルトの言う「文楽がもとめているのは身体の模倣ではなく，いわば身体の感覚的な抽象化」というのは，西欧のオペラと違って，文楽には「身体の模倣」（同化）ではなく，「身体の感覚的な抽象化」（脱身体化あるいは異化）が生起しているということであろう。

バルトによれば，西欧のオペラにおいては，複数の表現方法（演奏，歌，演技など）を統べる唯一不可分の起源としての身体の把握が，文楽と異なり，「擬人的」にならざるをえず，その統一的な主体の構築とそれへの「同一化」，「同化」を誘う演劇モデルとなるという。そこでは，身ぶりと言葉はその統一的な主体を裏切ることはなく，「ひとつの統一的な筋肉のようにひとまとまりになって滑らかに動く単一の組織」としての身体を構築する。しかし，よく見る（認識論的転回をはかる）なら，西欧の俳優は「統一的な筋肉のひとまとまりの滑らかに動く単一の組織」の「自然な」外観の下に，「身体の分裂」をなお保持している，というバルトの考察は，西欧ブルジョワジーの演劇モデルにおける唯一不可分の起源としての統一的な身体に亀裂を入れ，異化する観点をもっている。

このことは，トランスする可能性を考えるうえでも決定的な重要性をもつようにわたしには思える。演者や観客が交渉・交歓する舞台空間におけるだけでなく，日常空間におけるわたしたちの日常的な交渉・交歓空間においても，わたしたちの幻想・ファンタジーは，唯一不可分の起源としての統一的な主体化・身体化・自然化をむしろ，異化し脱自然化する方向生をももつことができると言えるのではないだろうか。

中村氏の刺激的な問題提起を受けて，二人のコメンテーターの応答もそれに劣らず刺激的な

問題提起となった。もともとこの研究会は，社会学研究科の院生である森岡素直氏が自らの切実な課題を思考するうえで，中村氏が創り出した「ジェンダー・クリエイティヴ」という概念にヒントを得て企画したものだった。森岡氏が日常的に直面する困難は，「男女二元論を前提に性別を尋ねられる，あるいは望ましくない性別で呼ばれるという困難」であり，そういう状況に抗して「自己命名」する場合に，ジェンダー化された慣習的言語使用によって支配的なジェンダー秩序の再生産に回収される恐れがあり，同時に過剰に「自己のジェンダー化」をせざるをえないという負担を抱えてしまうということである。

この問題は，いわゆる「セクシュアル・マイノリティ」とくくられる人々，トランス・ジェンダーやゲイ・レズビアンの抱える問題だけでなく，社会における支配的なグループに対置されるさまざまな「マイノリティ」が抱える困難・負担とも関連してくるものだろう。レズビアンとしてのポジションから語ることの困難については，堀江有里氏が問題化しつつ，「トランス・ポリティクス」を通しての共闘可能性を考えた。社会におけるさまざまな他者との関係性なかで，不可視のパワー関係・作用も含めて，私たちはこの困難や負担を問題化する言葉をもち，異なる在りようを想像・創造するファンタジーの企てを進め，認識論的転回をはかる必要がある。中村氏の提起する「トランス・ポリティクスの可能性」をさまざまな角度から思考することは，「汎用性の広い」魅力的な研究となるだろう。